

小倉百人一首

お正月のかるた大会などでおなじみの『百人一首』は、十三世紀に藤原定家が撰じたものといわれています。当時著名だった百人の歌人の歌を、一人につき一首ずつ選んで集めてあります。かるたとして楽しめるようになったのは、江戸時代に入ってからです。かるたとしてだけでなく、和歌としても楽しんでみるとよいでしょう。

1 秋の田のかりほの庵のとまをあらみ
わが衣手は露にぬれつつ
天皇智天皇皇

2 春過ぎて夏来にけらし白妙の
衣干すてふ天の香具山
持統天皇皇

3 あしびきの山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜をひとりかも寝む
柿本人麻呂

4 田子の浦にうち出でて見れば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ
山部赤人

5 奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の
声聞く時ぞ秋は悲しき
猿丸大夫

6 かささぎの渡る橋に置く霜の
白きを見れば夜ぞ更けにける
中納言家持

7 天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも
安倍仲麻呂

22 吹くからに秋の草木のしをるれば
むべ山風をあらしと言ふらむ
文屋康秀

23 月見れば千々に物こそ悲しけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど
大江千里

24 このたびは幣も取りあへず手向山
紅葉の錦神のまにまに
菅家

25 名にし負はば逢坂山のさねかづら
人に知られてくるよしもがな
三条右大臣

26 小倉山峰のもみぢ葉心あらば
今ひとたびのみゆき待たなむ
貞信公

27 みかの原わきて流るるいづみ川
いつ見きとてか恋しかるらむ
中納言兼輔

28 山里は冬ぞ寂しきまさりける
人目も草もかれぬと思へば
源宗朝臣

29 心あてに折らばや折らむ初霜の
置き惑はせる白菊の花
凡河内躬恒

30 有明のつれなく見えし別れより
暁ばかり憂きものはなし
壬生忠岑

8 わが庵は都のたつみしかぞ住む
世をうち山と人は言ふなり
喜撰法師

9 花の色は移りにけりないたづらに
わが身世にふるながめせし間に
小野の町

10 これやこの行くも帰るも別れては
知るも知らぬも逢坂の関
蟬丸

11 わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと
人には告げよ海人の釣舟
参議

12 天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ
をとめの姿しばしとどめむ
僧正遍昭

13 筑波嶺の峰より落つるみなのか
恋ぞつもりて淵となりぬる
陽成院

14 陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに
乱れそめにしわれならなくに
河原左大臣

31 あさばらけ有明の月と見るまでに
吉野の里に降れる白雪
坂の上の是則

32 山川に風のかけたるしがらみは
流れもあへぬ紅葉なりけり
春道列樹

33 久方の光のどけき春の日に
静心なく花の散るらむ
紀の友則

34 誰をかも知る人にせむ高砂の
松も昔の友ならなくに
藤原の興風

35 人はいさ心も知らず古里は
花ぞ昔の香ににほひける
紀の貫之

36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいづこに月宿るらむ
清原深養父

37 白露に風の吹きし秋の野は
貫きとめぬ玉ぞ散りける
文屋の朝康

38 忘らるる身をは思はず誓ひてし
人の命の惜しくもあるかな
右近

39 浅茅生の小野の篠原忍ぶれど
あまりてなどか人の恋しき
参議等

15 君がため春の野に出て若菜つむ
わが衣手に雪は降りつつ
光孝天皇

16 立ち別れいなばの山の峰に生ふる
まつとし聞かは今帰り来む
中納言行平

17 ちはやぶる神代も聞かず童田川
からくれなゐに水くくるとは
在原業平朝臣

18 住の江の岸に寄る波よるさへや
夢の通ひ路人目よくらむ
藤原敏行朝臣

19 難波渦短き蘆のふしの間も
逢はでこの世を過ぐしてよとや
伊勢

20 わびぬれば今は同じ難波なる
みをつくしても逢はむと思ふ
元良親王

21 今来むと言ひしばかりに長月の
有明の月を待ち出でつるかな
素性法師

40 忍ぶれど色に出てにけりわが恋は
物や思ふと人の問ふまで
平兼盛

41 恋すてふわが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひそめしか
壬生忠見

42 契りきなかたみに袖をしぼりつつ
末の松山波越さじとは
清原元輔

43 逢ひ見ての後の心にくらぶれば
昔は物を思はざりけり
権中納言敦

44 逢ふことの絶えてしなくはなかなか
人をも身をも恨みぎらまし
中納言朝忠

45 あはれとも言ふべき人は思ほえて
身のいたづらになりぬべきかな
謙徳公

46 由良の門を渡る舟人楫を絶え
行方も知らぬ恋の道かな
曾禰の好忠

47 八重律しげれる宿の寂しきに
人こそ見えね秋は来にけり
惠慶法師

48 風をいたみ岩うつ波のおのれのみ
くだけて物を思ふころかな
源重之

84	83	82	81	80	79	78	77	76	57	56	55	54	53	52	51	50	49
長らへばまたこのごろやしのばれむ 憂しと見し世ぞ今は恋しき 藤原清輔朝臣	世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥にも鹿ぞ鳴くなる 皇太后宮大夫俊成	思ひわびさても命はあるものを 憂きに堪へぬは涙なりけり 道因法師	ほととぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる 後徳大寺左大臣	長からむ心も知らず黒髪のは 乱れて今朝は物をこそ思へ 待賢門院堀河	秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ 左京大夫顯輔	淡路島通ふ千鳥の鳴く声に 幾夜寝覚めぬ須磨の閑守 源兼昌	瀬を早み岩にせかるる滝川の 割れても末に逢はむと思ふ 崇徳院	わたの原漕ぎ出て見ればひさかたの 雲居にまがふ沖つ白波 法性寺入道前関白太政大臣	めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に 雲隠れにし夜半の月かな 紫式部	あらざらむこの世のほかの思ひ出に 今ひとたびの逢ふこともがな 和泉式部	滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ 大納言公任	忘れじの行く末まではかたければ 今日を限りの命ともがな 儀同三司母	嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は いかに久しきものとは知る 右大將道綱母	明けぬれば暮るものとは知りながら なほ恨めしき朝ほらけかな 藤原道信朝臣	かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを 藤原実方朝臣	君がため惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな 藤原義孝	みかきもり衛士のたくひの夜は燃え 昼は消えつつ物をこそ思へ 大中臣能宣朝臣

93	92	91	90	89	88	87	86	85	66	65	64	63	62	61	60	59	58
世の中は常にもがもな渚漕ぐ あまの小舟の綱手かなしも 鎌倉右大臣	わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾く間もなし 二条院讃岐	きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣片敷きひとりかも寝む 後京極摂政前太政大臣	見せばやな雄鳥のあまの袖だにも 濡れにぞ濡れし色は変はらず 殷富門院大輔	玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば 忍ぶことの弱りもぞする 式子内親王	難波江の蘆のかりねのひとよゆゑ みをつくしてや恋ひわたるべき 皇嘉門院別当	村雨の露もまだひぬ横の葉に 霧たちのぼる秋の夕暮れ 寂蓮法師	嘆きてと月やは物を思はする かこち顔なるわが涙かな 西行法師	夜もすがら物思ふころは明けやらて 闇のひまさへつれなかりけり 俊恵法師	もろともにあはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし 大僧正行尊	恨みわびほさぬ袖だにあるものを 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ 相模	あさばらけ宇治の川霧たえだえに あらはれわたる瀬々の網代木 権中納言定頼	今はただ思ひ絶えなむとばかりを 人づてならて言ふよしもがな 左京大夫道雅	夜をこめて鳥の空音ははかるとも よに逢坂の関はゆるさじ 清少納言	いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重にほひぬるかな 伊勢大輔	大江山いく野の道の遠ければ まだふみもみず天の橋立 小式部内侍	やすらはて寝なましものを小夜更けて かたぶくまで月を見しかな 赤染衛門	有馬山猪名の笹原風吹けば いでそよ人を忘れやはする 大式三位

100	99	98	97	96	95	94	75	74	73	72	71	70	69	68	67
もししきや古き軒端のしのぶにも なほあまりある昔なりけり 順徳院	人もをし人もうらめしあぢきなく 世を思ふゆゑに物思ふ身は 後鳥羽院	風そよぐならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける 従二位家隆	来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに 焼くや藻塩の身もこがれつつ 権中納言定家	花さそふ風の庭の雪ならて ふりゆくものはわが身なりけり 入道前太政大臣	おほけなくうき世の民におほふかな わが立つ袖に墨染の袖 前大僧正慈円	み吉野の山の秋風小夜更けて ふるさと寒く衣打つなり 参議雅経	契りおきしさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり 藤原基俊	憂かりける人を初瀬の山おろしよ はげしかれとは折らぬものを 源俊頼朝臣	高砂の尾上の桜咲きにけり 外山の霞立たずもあらなむ 権中納言匡房	音に聞く高師の浜のあだ波は かけじや袖のぬれもこそすれ 祐子内親王家紀伊	夕されば門田の稲葉おとづれて 蘆のまろやに秋風ぞ吹く 大納言経信	寂しさに宿をたち出でてながむれば いづこも同じ秋の夕暮れ 良暹法師	風吹く三室の山のみぢ葉は 竜田の川の錦なりけり 能因法師	心にもあらでうき世にながらへば 恋しかるべき夜半の月かな 三条の院	春の夜の夢ばかりなる手枕に かひなく立たむ名こそ惜しけれ 周防内侍